



よこと館だより



Est.1912

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局

理事長閑話 埋め草 ⑤ ～福祉の国際化或いはアジアのソーシャルワーカー研修～

日本の社会福祉の国際化について考えると感慨一入（ひとしお）です。1960年代後半、私が大学で福祉を学び、将来の方向を考えていた頃、特に北欧の福祉国家の諸施策は日本にとって、高根の花の福祉でした。高度成長期の日本は公害と薬害、市民運動が盛んになり、経済の成長拡大が一方で社会の矛盾を際立たせていた時代です。1970年からフィンランドで学ぶ機会を得、落ち着いたその社会の充実度はまさに今に至る私の福祉観を規定づけました。帰国したのが福祉元年といわれた昭和48（1973）年でした。

今、日本はダウンサイジング社会で国際化とは外国人頼みの社会に移行するという現実です。至誠学舎立川の保育では今一時保育を含めて34人の外国籍又は親が外国人の園児が利用しています。また児童養護では12人が外国籍或いは親が外国人です。高齢では現在約30人の外国籍の職員が働いています。アジアのソーシャルワーカー研修事業に関わって思うことは、私がフィンランドで体験をした事を、今はアジアに伝えていく役割になったという思いです。フィリピンの研修生ジュリエットさんの感想文です。

（理事長 橋本正明）

●ジュリエット(Juliet V. Yara フィリピン) 社会福祉法人 至誠学舎立川

わたしは社会福祉法人至誠学舎立川の高齢者施設、児童養護施設、障害者就労継続支援B型事業所で研修しました。高齢者施設で一番印象に残っているのはデイサービスです。フィリピンで「デイサービス」という子ども向けのサービスで、日本では高齢者を対象としたサービスだと知り驚きました。送迎のお手伝いをする中で、一人暮らしの認知症の高齢者の方が多いことを知り、心が痛みました。また、児童養護施設では、毎晩小さな子どもに絵本の読み聞かせをしました。私の膝に座って眠る子どもを見て、読み聞かせは言葉の勉強だけではなく、スキンシップを通して子どもが自分の家族と一緒にいるような安心感を得られる機会だと思いました。就労B型作業所では、連絡ノートを使って、職場と家、双方での生活の様子をモニタリングしていて勉強になりました。家族と協力しながら生活を支えていくことは、介護する家族にとってもとてもよいと思います。



至誠学舎立川「よこと」vol.79 第39期発行 社会福祉

事業本部長メッセージ

芳朗（よしあき）の「あき」は「飽きっぽい『あき』」に由来するのだと、子どもの頃に家族から皮肉交じりに言われたたことを鵜呑みにしてきたのか、これまでの人生で何度も繰り返し実感してきた。三日坊主を地で行くこれまでの生き方と、自らの沈下した意識に変化を起こせるのか挑戦したかったのかもしれない。

平成30年の夏、とにかく一年間継続してみよう！と一念発起で始めた「体を動かすこと」が、令和に変わった今も、時代を超えて細々とつづいている。これはもう人生初の「コツコツと継続しています体験」なのである。一年続けていれば、きっとその時の景色は変わっているはず。その景色を一度でいいから見てみたい。先は、その時になったら考えよう。という見切り発車のスタートも懐かしい。今は、体育館の休館日が恨めしいほどに。意識と継続によって人は変わるものである。トレッドミルの上で、10か月間はひたすら走らずに歩いた。生活の中で「体を動かすこと」の優先順位をあげた。食事に少しだけ気をつけるようになった。結果、体重が落ち、生活習慣病予防検診の結果欄に「再検査」の印字が消えた。

仕事全てではない。自らの健康や喜び、楽しみのために時間を有意義に使おう。そんな当たり前のことを堂々と笑顔で語れる魅力的な職場にしよう。意識が変われば組織も変わる。その先の景色を楽しみにしながら、令和2年、新しい年のスタートを切りましょう。（児童事業本部長 石田 芳朗）

事業本部情報

児童事業本部

いよいよ2020年。オリンピックイヤーのスタートです。今でこそオリパラなどと言われ、オリンピックのあとのパラリンピックが当たり前になっていますが、56年前に第2回東京パラリンピックが開催されました。当時はまだ一般的でなかった大会を実施するためにたくさんの関係者が奔走したそうです。当法人の役員であった町田英一先生もその一人で、準備から取り組み、開催中は選手村の渉外連絡部長をされ、「徐行している選手村循環バスの後ろにつかまって車椅子のまま走っている選手にもびっくりさせられたが、インターナショナルクラブでの楽しそうなダンスパーティー、夜タクシーをつかまえ、車椅子を積み込ませて渋谷の盛り場に繰り出してゆくグループを見ているとむしろ呆然とさせられたものであった。」(『創立20年史』日本身体障害者スポーツ協会編)と記しておられます。当時の外国と日本の、障害者の置かれていた環境の違いがよく伝わる一文です。このパラリンピックに参加した約500人の外国選手のほとんどが仕事を持っていたのに対して53人の日本選手のうち仕事を持っているのはわずか5人、その他の選手は自宅か療養所で誰かに面倒を見て貰っていたそうです。スポーツをする以前の環境であったことは明らかです。今、障害のある方をとりまく環境、社会の大きな変化を実感すると同時に、これからは当たり前に共に生きる社会を作っていく事がとても大切だと考えます。

「至誠障害福祉総合センター」もいよいよ今年度スタートします。法人の皆様のお力添えを頂き、大きな一歩を踏み出す年としたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

(ワークセンターまことくらぶ 施設長 阿久津嘉代子)

保育事業本部

明けましておめでとうございます。1月はおせち料理など食について話題になります。食は豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けるために欠かせない物です。保育園における食育は「食を営む力の育成に向け、その基礎を培うことを目的としています。栄養士と保育士、看護師等が協力しながら、日々の保育の中で、生活と遊びを通して、お子さまが意欲を持って食に関わる経験を積み重ねています。ある日の保育園の出来事です。『キッシュ』が出て、皆で「美味しいね」と目を細めていました。年長児一人が栄養士に「今日の給食の美味しかったから作り方教えてほしい」と言ってきたそうです。理由は美味しかったからパパの誕生日に作ってあげたいとの事でした。数日後、2人で作り大成功と親子から報告があったそうです。日々の活動の中で、豊かな経験を通し、感じたり、気付いたり、考えたり、心情、意欲が育ち、学びに向かう力、人間性が総合的な活動を通して養われていると感じた出来事でした。

今年も保育事業本部は「生き生きとした子どもをめざして」を目標に、保育の質の向上を目指してまいります。本年も宜しくお願いいたします。(事務局/万願寺保育園園長 長谷川 育代)

高齢事業本部至誠ホーム

今年度は東京オリンピックの年です。その開催に向けて、国分寺市はベトナムのホストタウンとして、文化やスポーツの相互交流をしています。

昨年末、国分寺市主催でベトナム料理教室が開催され、参加した市民の皆さんが生春巻きやフォーといったベトナムの代表的な料理を作りました。その際講師を務めたのは、至誠ホームミナ特養に勤務する語学留学生ハー・タック・タオさんです。タオさんは2年前に来日、日本語学校に通いながらミナ特養で介護職として勤務しています。学校の紹介で今回の講師となり、2年かけて上達した日本語で講義・実習を担当し、当日視察に来ていた国分寺市長にも料理を振舞いました。市長は生春巻きをほおばり「現地で食べたものより美味しい！」と大変喜ばれていました。この模様はケーブルテレビでも放映されました。

至誠ホームでは、現在30名以上のフォーリンスタッフ(外国人介護職員)が勤務しています。介護はもちろん、その他にもこのような活躍の場があることは素晴らしいことです。地域を取り込んだ多文化共生がさらに進めばと思います。(至誠ホームミナ園長 諏訪 逸)

本部事務局だより

～定年延長～

新年あけましておめでとうございます。今年の明るい話題と言えば何と言っても東京オリンピックでしょう。私もまさか東京オリンピックを二度見る(テレビ観戦ではあるが)ことになろうとは思っていませんでした。札幌冬季オリンピック・長野冬季オリンピックを含めるとなんと4度目のオリンピックに巡り合うとは長生きはするものです。長生きと言えば、長寿国日本の平均寿命は、男性81.25歳、女性87.32歳と世界のトップクラスです。長生きは良いことではありますが、頼みの年金は近じか65歳支給となり60歳で定年退職すると5年間収入が無くなります。このため2025年から定年を65歳にするよう法律が改正されています。

至誠学舎立川では、これに先んじて今年4月1日以降、職員・契約職員の定年年齢を毎年1歳ずつ引き上げて行き2024年度以降に60歳を迎える方の定年は65歳にすることになりました。また、定年後も働くことを希望し認められた方は引き続き契約職員として70歳まで働くことができるようになります。次のオリンピックも見られるよう明るい一年の計をたてましょう。(法人事務局長 野島忠幸)

(編集後記)新年あけましておめでとうございます。今年はいよいよオリンピック・パラリンピックイヤーです。テレビ観戦はもちろんですが生でもできれば経験したいですね！